

## University Academic Repository

ゼミを中心としたカリキュラムの連続性：  
学生が育つ授業・学生を育てる授業-教員と学生が授  
業をつくる

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 博幸, 内田, 和夫, ナカムラ, ヒロユキ, ウチダ, カズオ, Nakamura, Hiroyuki, Uchida, Kazuo メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/245">https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/245</a>

## ゼミを中心としたカリキュラムの連続性

～学生が育つ授業・学生を育てる授業—教員と学生が授業をつくる～

### Curriculum Consistency Centered on Seminars

～Classes nurtured by students, and classes which nurture students:  
teachers and students making classes together～

中 村 博 幸

Hiroyuki Nakamura

#### 掲載にあたって

この講演は、昨年2月8日に嘉悦大学において開催した2007年度第2回全学FD・GPフォーラムにおける中村博幸先生によるご講演を再録する企画から掲載にいたったものである。本フォーラムの開催に先立ち、研究論集委員会から、研究論集の充実を図る趣旨で、基調講演の研究論集への掲載の勧めをいただいた。このため、中村先生にも事前に講演から研究論集への掲載までを1つの企画としてお引き受けいただく旨、御了解をいただいた。反訳の作成等のフォーラム開催経費の一部についても研究論集委員会が負担下さり、両委員会の実質共催のかたちでフォーラムが開催された。

フォーラム終了後、FD・GP委員会では、当日のご講演の反訳に、先生がレジュメにおいて当初中心にお話くださることを予定した内容を存分に加筆くださるようお願いした。フォーラム当日は、教員を学生に見立てた模擬授業の実施に思いのほか時間を要した関係で、当初先生が予定された講演内容の多くに言及できないという残念な結果となっていたからである。

委員会の要望を汲んでくださり、先生は大幅に加筆・再構成下さり、論文調に整えられた原稿として完成くださった。委員会からの要望が却ってお手間をとらせる結果となり、掲載が大幅に遅れることとなった。超多忙の中、こころよく、講演録の取りまとめに応じてくださった、中村博幸先生に改めてお礼を申し上げる次第である。

2007年度FD・GP委員会

#### <要 約>

大学教育が転換を迫られて久しい。それは、学問の成果を伝授する大学から、学生が学習を進めるための大学への転換であり、大学自体も3つの類型へと分化する。大学・学生類型によって、学生の特性とそれに応じた教育の重点は異なる。カリキュラムの重視が要請される。教育目標とそれに沿った科目構成と科目内容、学生類型にマッチし、学習階梯をわか

り組んだものが求められる。初年次教育の重視も大事となる。「生徒から学生になること」を目標に、接続教育、転換教育、導入教育、の視点を踏まえる必要がある。それが2年次以降の学生生活の充実につながる。

ゼミナールは、卒業論文の執筆も含め、研究プロセスの体験に教育目標がある。それが4年間のゼミナールで達成されるよう学習階段をしっかりと組むべきである。1年と2年のゼミナールでは、大学での学びの考え方や習慣の獲得、リサーチ・スキルの習得、研究プロセスの体験・習得が柱となる。2年次のプレゼミナールは専門プレゼミナールと位置づけ、所属コースの専門分野の基礎を学び味わいつつ、リサーチ・スキルの習得、研究プロセスの体験・習得を再度積み重ねるものと考えれば役割が整理できる。これからのゼミナールの視点と方法としてはアクティブ・ラーニングという考え方が重要となろう。

## <キーワード>

カリキュラム、大学・学生類型、初年次教育、専門プレゼミナール、研究ごっこ、アクティブ・ラーニング

# 第1章 大学教育の転換とカリキュラム

## 第1節 大学教育の転換とカリキュラムの重視

大学教育が変わっていく必要に迫られて久しい。そうなった最大の理由は、同一世代の若者のうちの限られたものだけが大学へ進学した時代から、進学を希望する若者全員が大学へ進学する時代となったからである。高校進学者の実に50%以上が大学へ進学しているのである。

では、大学教育の考え方のどこが変わっていく必要があると迫られたのか。

大学とは、研究と教育の場であるといわれていた。そして、そこで、おこなわれていた大学教育はどのようなものか。端的に言えば、大学教育とは、教員が学問の成果を教えることを指していたのである。つまり、教員はみずからの専門の学問の成果を教授すればよく、個々の学生自身がそれをチョイスしながら学ぶものであればよかった。学生が、そこで学んだことは、学生自身の主体的責任において、次のステップのために役立てるというしくみであった。つまり、教員は、大学教育という場では、自身の専門的学問について教えられることを教えていれば、それでよかったのである。

では転換をせまられてからはどうか。大学教育とは、入学した学生が学習を進めるためにあるということになった。この意味転換が大学に対して何を実践的に意味するかは本稿全体を通して述べさせていただくわけであるが、そのための改革を大学間で協働して自覚的に進めようとした試みの一つが、筆者も深くコミットしてきた、大学コンソーシアム京都主催に

よるFDフォーラムである。また、文部科学省が昨今、大学の学部レベルの教育を学士課程教育と呼ぶようになったのも、そうした大学教育の抱える課題を反映したものと受け止めることができる。

このように、大学教育が、入学した学生が学習を進めるためにあるものに意味転換したとき、まず、第1に、かえり見られるべき対象となったもの、重視すべき対象となったのは、大学教育のカリキュラムである。

カリキュラムとは日本語では教育課程と訳す。つまり、カリキュラムを重視することが必要になったことは、大学において、教員集団が何を教えるかが大事なことは当然であるが、教員集団が、どう教えるかも大事になったことを意味する。

例えば、ある学科において、カリキュラムを作成する場合を考えると、その学科の教員の専門分野の科目をただ寄せ集めたものをもって、ここでいう大学のカリキュラムとはいわないということである。その学科の教育目標という柱が、まず立てられるべきであり、それに沿った科目構成と科目内容を備え、さらには、入学してくる学生類型にも対応して、各学年の学習階梯がしっかり組まれたものとする必要があるということである。

カリキュラムを作成する上では、さらに、大学総体としてかえりみるべき項目もある。そもそもの建学の理念、各学部各学科の軸とする学問、入学定員の確保、入学してくる学生類型と目指すべき学生像、主たる就職先、保護者や出身高校の要望、地域社会での役割、などである。

## 第2節 大学・学生類型とカリキュラムのマッチング

入学した学生が学習を進められる大学教育へと転換する上では、上記で指摘した適切なカリキュラムを作成することが重要となるわけだが、カリキュラム作成にあたって、上にあげた項目の中でも、最重要項目が、入学する学生の学生類型とそれに連結した大学類型を誤らないという点である。ここではそれを大学・学生類型とよぼう。大学・学生類型は、大きく3類型に区分できる。もとのアイデアは、M. トロウの類型化である。大学自身がこれら3つのどの類型に属する大学として入学者を確保でき、現在、存続しているのか、今後も存続していけるのか、見定める必要がある。

確認するまでもないが、当該大学が、どの類型に属するかで、カリキュラムの構成や内容が、大きく異なってくるからである。大学が、そこを見誤らないことによって、学生が当該大学に入学したことに満足覚え、納得できる学生生活を送り、教育目標を達成して卒業できることにつながる。

以下、3つの大学・学生類型ごとに説明を加えるが、カリキュラムとのマッチングのありようを、初年次における基礎ゼミナールを中心としたカリキュラム（以下、初年次カリキュラムと略す）の在り方において例示しながらのべていく。なお、3類型の対照表を図表1としても掲げたので、適宜参照いただきたい。

図表-1 大学・学生類型と初年次教育の各要素の内容

(◎目標的 \*具体的)

		オリエンテーション	基礎ゼミナールを中心としたカリキュラム	カリキュラム外学生サポート
大 学 ・ 生 類 型	A 類 型	◎発展的学習の場の提供 *本学カリキュラムの系統的説明 *専攻する学問体系へのガイド *学ぶ学問を展開するためにどうするか (学会・研究会・勉強会の存在)	◎知的好奇心の涵養(オリジナリティの追究) *クリティカルシンキングを鍛える *多様なレトリックを理解する *アイデアの拡散 創造的アイデアとは *アイデアの収束 概念→具体へ *コミュニケーション・スキル ・他人や意見の異なる人とのコラボレーションできる ・グループダイナミックス、リーダーシップ的要素	◎必要な学生のためのサポート *学問的アドバイス *自主ゼミのすすめ *研究室活動への勧誘
	B 類 型	◎本学の教育方針の理解 *大学のシステムの理解 履修登録の理解 カリキュラムを理解して、自分で履修計画が立てられる 図書館ツアー *各種サポートの紹介 奨学金・学生相談室・キャリアアップの手立て	◎導入教育 *リサーチスキルの基礎 ・レポートの書き方…目的別 ・討論の種類と方法などを理解し、身につける ・資料の必要性と収集 *アイデアの拡散 B Sなどのテクニックの習得 *アイデアの収束 K Jなどのテクニックの習得 *情報スキル ・ネットワークの活用 ・統計手法などが使える *コミュニケーション・スキル ・外国語を使ってコミュニケーションがとれる ・グループ活動の実際をテクニク的に習得する	◎学習支援 *学力不足の学生に基礎学力を付けるためのサポート体制への誘導 *学生相互の交流のサポート 交流したくてもできない学生への仕掛け (コンパ、催し物) *「引きこもり」からのサポート 学生が選んだタイプの合った教員との面談 学生相談室との連携 *よろず相談 (高校の担任、クラブ顧問的)
	C 類 型	◎学習の動機づけ *就学不安の解消 *教職員とのふれあい *リメディアル教育への誘導 *きめ細かい学習ステップの提示 *生活習慣向上の必要性	◎教員との対話 *授業を通して学生と親しくなる ◎学習習慣の涵養 *授業に出席する習慣をつける ◎学習意欲の喚起 *ラーニング・スキル ・ノートテイクの方法 ・テスト勉強の方法 *大学の授業の聞き方 *身近な成果を与える	◎就学支援 *習慣的不登校をなくす こまめな声かけ *履修計画を教員とともに作成する ◎逸脱からのサポート *定期的面談 個別に面談し、学生の状況を把握する *生活習慣に対するアドバイスを行う *教員との対話 大学側も「人」の集まりであることへの理解

大学・学生類型のA類型は、いわば、研究型大学である。この類型の大学には高偏差値の学生が入学してくる。高校段階の学習も十分であり、学生の多くはエリート型の思考をもつ。入学学生は、大学生としての意欲を十分にもち、自学自習が身につけている。初年次カリキュラムの目的は、知的好奇心の涵養である。内容としては、クリティカルシンキング、多様なレトリック、アイデアの拡散と収束、コミュニケーション・スキル、などにより構成する。カリキュラム外の学生サポートとしては、それを必要とする学生のみを対象とすればいい。

B類型は、高度教育型大学といえよう。この類型の大学は中程度の偏差値の学生の入学してくる大学である。この類型の大学の学生は、高校での学習が一定程度は身についたといえる層の学生ではあるが、その多くはいわゆるマス型の思考をもつ。この類型の大学においては、オリエンテーションがまず、重要である。オリエンテーションにおいては、当該大学の教育方針についての理解を図ることが重点目標となる。当該大学で学ぶ学生としての自覚を促す必要があるからである。また、初年次カリキュラムとしては、高校での勉強を大学での勉強へとつなげるためには導入教育（学習技術の習得）が欠かせない。内容的には、リサーチ・スキルの基礎、アイデアの拡散・収束、情報スキル、コミュニケーション・スキル、が考えられる。また、カリキュラム外のサポートとしては、学生たちの勉強が促進されるための学習支援の諸事業がある。

C類型は、普遍教育型大学である。この類型の大学は、偏差値50を切る学生も多数入学するタイプの大学である。学生の多くは、みんなが大学に行くのだから、自分もいこうという、ユニバーサル・アクセス型の思考をもつ。この類型の大学では、オリエンテーションの目標は、学習自体の動機づけである。修学不安の解消、教職員とのふれあい、リメディアル教育への誘導、きめ細かい学習ステップの提示、生活習慣の向上が、その内容となる。初年次カリキュラムの重点目標は、第1に、学生が教員との対話を求める傾向もつよいのでそれに応じる「教員との対話」である。授業を通して学生と親しくなる観点もわすれてはいけない。第2に、「学習習慣の涵養」である。要するに授業に出席する習慣をつけることがポイントとなる。第3に、「学習意欲の喚起」である。内容としては、ノートテイクの方法やテスト勉強の方法を含む、ラーニング・スキル、大学の授業の聞き方、そして、身近な成果を与えるものであることが重要である。カリキュラム外のサポートとしては、第1に、学習支援以前の就学支援、である。

また、C類型の大学ばかりではないが、精神的に未熟であったり、家庭的にも悩みをかかえていたり、学習障害を抱えていたり、といった学生もみられるので、そうした学生への支援をどうおこなうかも課題となってくる。

少子化全入時代の大学は、入学者を確保できるための社会的評価を大学として受けていくためにも、これら3類型のどの類型にあてはまる大学であるのかを自覚して、カリキュラムを的確に作成し、カリキュラム外の学生への支援のポイントも誤らないことである。

## 第2章 初年次教育の目的・視点・内容

前章では、大学教育は、入学学生の学習が進むものでなければならないこと、そのためにはカリキュラムを重視する必要がある、カリキュラムを考える上では、当該大学の大学・学生類型を見誤らないことが大事であることをのべた。そして、カリキュラムの視点と内容を、初年次の「基礎ゼミを中心としたカリキュラム」を例にのべ、カリキュラム外学生サポートのあり方についても紹介した。

気づかれた方も多しとおもうが、転換した大学教育においては、初年次教育の役割が重要になってくる。第2章では、その点を取り上げる。

### 第1節 初年次教育の目的と視点

初年次教育が大事なこととなってくるのはなぜか。

高等教育進学者が50パーセントを超える中で、入学学生の多くが高校生とおなじ生徒意識のまま、集団でどっと大学へ来る若者だからである。大学の入学式に、保護者も行かなければならない、行きたいと考える保護者が多数となってきた。そうした事態に的確に対応するために必要とされるのが初年次教育である。これは、先ほどの大学・学生類型でいうと、B類型、C類型では必須の課題となる。

初年次教育の目的は何か。目的を一言でいうと「入学学生が生徒から学生になること」といえよう。いわゆる学生として入学を許可された若者が単なる「所属としての学生」から実質的な「学習者としての学生」になっていくまでのプロセスをアレンジするものということができる。このプロセスでつまずくと、2年生以降の学習がスムーズに進まない結果になる。大学生に生まれ変わることでできなかった若者の大量輩出ともなりかねない。教員の立場からみても、初年次教育に手間を惜しむと、2年生以降で多大な手間を要することになる。

では、そうした目的をもつ初年次教育を組み立てる視点を整理してみたい。

初年次教育の第1の視点は、高校と大学とのスムーズな橋渡しをする「接続教育」という点である。学力の不足を補うリメディアル（学力の補習）、大学で学ぶことへの不安や気おくれの解消があげられる。第2に、後期中等教育における学習から高等教育における学習への自覚を涵養する「転換教育」という点である。受け身の教育から能動的な教育へと学生の主体の転換を図ることである。第3に、大学での教育を受けるためのレディネス学習としての「導入教育」という点である。大学の学び方のさまざまなスタイルやスキル（たとえば討論やレポート）を身につけていくことである。

### 第2節 初年次教育の内容

初年次教育では、さまざまな取り組みを融合的にやっていくわけであるが、その内容は3つの要素にまとめることができると考えている。第1が初年次カリキュラム、第2がオリエ

ンテーション、第3が、カリキュラム外学生サポートである。

第1の初年次カリキュラムであるが、基礎ゼミナールと、コミュニケーション・ツールの習得が軸となる。基礎ゼミナール自体については次章でのべる。

初年次教育では「コミュニケーション力」の形成を重視するという点について解説をくわえよう。それは、①言語によるコミュニケーション、②情報ツールの習得、③外国語、の3つからなる。①を主として担当するのが基礎ゼミ、②と③は、別途、担当教科が設けられる。②と③は、コミュニケーションツールの習得と言い換えてもいい。英語は、コミュニケーションツールの一つとしてとらえている。ジャパングリッシュでもいいから、いろいろの文化の人と英語でしゃべれるようにする。パソコンも筆者の大学では、学生にノート・パソコンを持たせて、半期でエクセル・ワード・インターネットの基礎的なことを全部教えている。

第2がオリエンテーションである。全学オリエンテーションでは、この大学はどういうことを目指す大学で、あなたは何をしなくてはいけないかについてガイダンスをする。また、学科オリエンテーションのポイントは、カリキュラムの系統性の説明を丁寧にする事だ。学科所属の先生方に説明役になってもらうと、カリキュラムのあり方について教員自身の勉強にもなる。そして、手続きオリエンテーションである。履修はどのようにすればいいのか、図書館利用はどう手続きするのかといった点である。事務方中心に担われていることが多い。

第3が、カリキュラム外学生サポートである。学生たちは、オリエンテーションを受けて、大学生活をスタートするわけであるが、学生は当然、勉強にゆき詰まってくる。その時こそ、必要な教員、職員、友達に相談に行くことが重要である。私の大学でいうと、教員は担任という形でアドバイザーの役を引き受けている。この教員アドバイザーの役割は、研究型の大学では、学問的アドバイスが中心になるかとおもう。しかし高度教育型大学では、学習支援や学生同士の相互交流の仕掛け、引きこもりへのサポートなども大切となる。さらに、普遍教育型大学の場合は、就学支援や逸脱を防ぐサポート、定期的面談による生活習慣形成の支援、学生との対話の機会のしかけづくりがある。

しかし、学生の相談はなにもかも、教員が引き受けるということではない。フォーマル、インフォーマルなアドバイザーのネットワークが必要である。フォーマルという面では、たとえば、リスト・カットをしてしまう学生がいた場合は、臨床心理士に相談できる体制があるといった、教員・職員間の役割分担のネットワーク体制である。また、インフォーマルという面では、学生たちを同学年同士、あるいは先輩後輩同士、知り合い仲良しにしておくというようなことがある。研究室にきている学生にお茶やお菓子を出して勝手にしゃべらせておくと、友達同士の悩み相談ネットワークが次第に作られていく場合もある。

### 第3章 ゼミナールの学習階梯と2年次ゼミナールの位置づけ

#### 第1節 ゼミナールを中心としたカリキュラムと学習階梯

大学のカリキュラムの中で、ゼミナールを中心に据えるのはどういう教育の上の目標を掲げることになるのかをまず、確認しておこう。ゼミナールは、まず第1に、ある問題について課題そのものを発見し、それを明確にし、講義で培った知識を動員しながら、問題の解決を図るというプロセスを体験することに、その目標が置かれている。

卒業論文をゼミナールで執筆することも、そうしたプロセスを体験するところにあるといえよう。ゼミナールを学習の成長の幹と考えれば、講義はそこから延びる枝と考えるべきである。プロセスの体験としての卒業論文の執筆が4年次に可能となるためには、各学年のゼミナールが学習階梯をなして呼応することと、各学年に配置された科目が、専門的なものを深めていけるよう適切に配置され、それぞれの講義内容が準備される必要がある。

以下では、嘉悦大学の4年間のゼミ配置に、沿う形で、4年間のゼミナール自体の学習階梯を整理してみたい。嘉悦大学経営経済学部の現行カリキュラムの、それぞれの学年に設置された通年のゼミナールを仮につきのように呼べば、それぞれのゼミナールの性格がはっきりするのではないかとおもう。すなわち、基礎ゼミナール（1年生）、プレ専門ゼミナール（2年生）、専門ゼミナール（3年生）、卒論ゼミナール（4年生）である。

嘉悦大学のゼミナールは、4年生の履修するゼミナールⅡにおいて、卒業論文の執筆が単位取得の要件となっている。1年間のゼミナールは、卒業論文の制作を中心に進むであろうから、これを卒論ゼミナールと呼ぼう。それに先立つ、3年生のゼミナールは専門ゼミナールの位置を占める。2年間指導を受ける担当教員についてそのゼミのテーマの専門領域をはじめ本格的に1年間学ぶ。文字通りの専門ゼミナールである。この専門ゼミナールの内容は、担当教員により異なるとのことである。1年間を専門分野の理解や問題意識づくりにあてる場合と卒業論文の前段のプレ論文作成に取り組む場合があるとのことである。いずれにせよ。この2年において、専門分野の理解を深め、研究テーマを見つけ、4年間の勉強の集大成として、卒業論文に取り組むのが、嘉悦大学のゼミナールということになる。

その前段として、カリキュラムとしては、1年次に基礎ゼミナール、2年次にプレゼミナールが置かれている。聞くとところによると、基礎ゼミナールについては、共通カリキュラムにより、初年次教育を目的に、実施されており、目的においても内容においても共通理解がなされているとのことであった。それに対し、2年次のプレゼミナールをめぐっては、所属コースごとに設置されているものの、1年次の基礎ゼミナールの延長上に位置づける考え方と3年生で所属する専門ゼミで学ぶための前段のゼミであるという考え方をとる教員がいるとのことであった。

筆者は、2年生のゼミナールをプレ専門ゼミナールと呼び、その役割を明確にするのがよいのではないかと考える。もちろん、このゼミナールは、基礎ゼミナールとゼミナールⅠ・

IIをつなぐものとして設定されているのだが、問題は「つなぎのプレゼミ」にどういう意味を持たせるか、である。

この課題を検討する前に、「基礎ゼミナール」の考え方について2点確認しておきたい。

## 第2節 基礎ゼミナールの考え方

### (1) 基礎ゼミナールの2つのポイント

基礎ゼミナールのあり方を実践的に考える上では2つのポイントがある。その第1は、ここでいう「基礎」の意味を何に置くかであり、第2は、どこまで教員間での統一をはかるかである。

### (2) 「基礎」の意味を何に置くか

通常、「基礎」の意味はつぎの3点の意味で使用されているといえよう。第1の意味は大学への「入口の基礎」という意味である。これはいわゆる高校からの接続教育とか、転換教育といわれるものを指す。大学の授業へのソフト・ランディングを図るためのものである。大学生としての勉強のスキルを知り、身につけることといていい。具体例をあげれば、ノートの取り方、レポートの書き方、プレゼンテーションの技法などがあげられよう。第2の意味は「下支えの基礎」という意味である。これは専門的な学問を学ぶためには1年の段階で身につけておいた方がよいものという意味である。例をあげると、「調査法」を知ること、実験方法の基礎を理解すること、コンピューター・スキルを身につけること、などがあげられる。第3の意味は「取り囲む基礎」という意味である。臨床心理学科の例をあげると、将来に備えて、ユング心理学や実験心理学を知っておくことがあてはまる。

これらのどの点に「基礎」の意味をどう定めるかが問題となる。それぞれの大学において、大学生の実情、専門分野の学問領域、専門分野の学習の目的、などを勘案する中で、どの点に定めるかが各大学、各学部、各学科で異なってくる。

### (3) ゼミ間の内容の統一をどこまで

基礎ゼミは専門ゼミとちがって、「指導方法」「シラバス」「カリキュラム」「フォーマット」とも、かなりの程度統一をはかった方がよいというのが私の意見である。基礎ゼミは統一、専門ゼミは担当教員各人による応用という考え方がよいとおもう。

基礎ゼミは統一をはかった方がよいという理由は2つある。第1に基礎ゼミは、学生に対して所属を指定する方式であるからである。学生が所属ゼミつまり担当の先生を選べない以上、どのゼミでも同じことが学生からみてやれるということを保障すべきだということである。第2に、基礎ゼミの目的が専門ゼミでの応用を行うための基礎の下ごしらえであるのなら、専門ゼミが各担当教員の応用で展開されるためにも、身につけるべき、基礎をスタンダードに統一した方が学生のためになるということがあるからである。

もうひとつ、第3の理由として、担当教員の実情がある。基礎ゼミの担当教員は、本来その学科の専門科目を講義する教員があたるのが通例である。そのため、基礎ゼミの「指導方法」ひとつとっても、各教員の意見は総論賛成、各論反対となりがちである。先生自身に「指導方法」における得手不得手が当然あって、それが賛否に反映してしまうからである。この点では、基礎ゼミの内容の統一をすることは、どの先生にも指導できる方法を工夫することも実は意味している。また「フォーマット」の統一は、指導のための、いろいろなグッズの開発を共同でおこなうことを意味し、教材・教具開発に対する各担当教員の負担がへることも意味している。

#### (4) 基礎ゼミの「統一」のためには教員間の合意が不可欠。

もちろん統一するためには、(2)の項目で「何に基礎を置くか」について述べたような視点から、学科単位での統一であれ、学部単位での統一であれ、教員間で十分な議論を図り合意をみる必要がある。

### 第3節 専門ゼミナールの前に設置される、1年と2年のゼミの「基礎」の内容

3年次の専門ゼミナールに入る前の1年次と2年次のゼミにおいて、いわば、「ゼミナールの基礎」として取り組むべき事項を整理すると、それは、つぎの3つとなる。すなわち、① 大学での学びの考え方と習慣の習得、② リサーチ・スキルの習得、③ 研究のプロセスの体験・習得、である。

#### ①大学での学びの考え方と習慣の習得

これは、大学生としての勉強のスキルを知り、身につけることで、大学の授業へのソフト・ランディングを図るためのものである。具体的には、講義ノートの取り方、レポートの書き方、プレゼンテーションの技法、コンピューター・スキルなどの活用が課題となる。そして、それを通じて、大学という場での勉強の習慣をも身につけていくということである。

#### ②研究のテクニク・スキルの習得

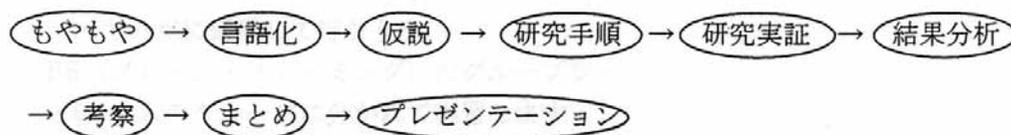
これは、専門的な学問を学ぶために1年2年の段階で身につけておいた方がよいものという意味である。例をあげると、「調査法」、「実験方法」、「討論方法」、「アイデア集約法」(KJ法)、「文献検索法」、「資料収集法」などである。

#### ③研究プロセスの体験・習得

研究の流れは、一般に(1)事象や問題に対するモヤモヤしたイメージのことば化・問題の意識化、(2)文章化による研究テーマの設定、(3)事象や問題を説明したり、理解する仮説の提示、(4)実証するための研究手順・つまり計画の作成、(5)アンケート、実験、文献研究による実証、(6)実証作業をもとにした分析、(7)仮説と照合する考察、(8)まとめ、(9)発表・論文化によるプレゼン、という経路をとるといえよう。1年、2年のゼミでは、このプロセスを「研究ごっこ」というレベルでいいから、体験し、すこしずつ習得していく

ことが必要である。

図表－２ 研究のプロセス



この研究の流れの習得は、1年生から卒業研究まで、繰り返し習得していくものではあるが、(4)以降は具体的な行動であり、指導もたやすく、学生も学習しやすい。卒業研究の段階で、多くの学生ができないのは、「テーマ化・仮説化」の部分である。

#### 第4節 専門プレゼミナール（2年次）の位置づけと内容

1年生のゼミナールも2年生のゼミナールも、3年以降の専門のゼミナールへの「基礎」を培うことでは共通し、しかも、2年生のゼミは専門ゼミへの橋渡しともなる。というふうにとらえれば、2年次のゼミナールを専門プレゼミナールと呼び、位置づけることが明瞭となる。

1年次の、基礎ゼミナールの組み立ては、春学期に、3つの要素のうち、① 大学での学び方の学びと学習習慣の獲得、② 研究のテクニック・スキルの習得、を中心にすすめ、秋学期は、③の研究プロセスの体験・習得を中心に進めることとするのである。ここでは、考え方として、何をテーマとするかよりも、どうテクニックを学ぶかに力点をおいて、学習法や指導法を工夫すべきである。

そして、2年次となる。専門プレゼミナールと位置づけるということは、コースの専門学問に近い素材や内容により、②研究テクニック・スキルの復習と③研究のプロセスの体験・習得を、メインに据えるということである。つまり、コースの専門分野の学問の内容のごく基礎を学び味わいつつ、研究テクニック・スキルと研究プロセスの体験・習得を、基礎ゼミナールに次いで重ねておこなっていくのである。

基礎ゼミナールを学部統一カリキュラムとしている場合には、必要とされる研究スキルの吟味、体験すべき研究プロセスの吟味を行い、基礎ゼミナールに盛り込むべきである。また、2年次からコースや学科にわかれる以上は、1年次の復習を行う面に加え、その学科、そのコース独自の研究テクニック・スキルの獲得および研究プロセスの体験・習得を2年次において加える必要がある。

専門プレゼミナールが「橋渡し」である意味は、内容をやや専門的にする点で3年のゼミナールへつなぐ、研究テクニックを復習し習得度を高める意味で3年ゼミへつなぐ、研究プ

ロセスを体験・習得し、自身で問題を立て研究へ入れるという意味で3年ゼミへつなぐということになる。

#### 第4章 これからのゼミナールの視点と方法——アクティブ・ラーニング

これからのゼミナールではアクティブ・ラーニングという考えが重要になる。ゼミナールは学習者主体の授業形態である。その点に注目して、ゼミナールを活発にする授業の組み立て方として、アクティブ・ラーニングがある。

アクティブ・ラーニングに注目するようになったのは、学生を指導していつぎのようなことがわかってきたからである。第1に、教員のおしゃべり中心の授業にはついてこれない学生が増え、自身で実際になにかをする方を好むことである。第2に、学生の多くが、論を学んでから演習という手順では理解が進まず、動きを伴うことをやって論を理解することである。実際に動いてみるのが学びにつながる。しかし、ただ学生を動かせばいい、ただ実際にやらせればいいということにはならない。

アクティブ・ラーニングにおいては、教員と学生の関係において何を教育と考えるかの捉え方が変わる。つまり、教員が教授・指導を行うと学生がそれを学びとるのが教育であるとする関係を変えることになる。

このアクティブ・ラーニングを指導する場合、教員は、レクチャー型教員では指導ができない。そうした教員は自身の壁を崩し、ファシリテーター型教員となる必要がある。教員が模範を示すのではなく、学生に「あなたが動きなさい。教員は横でみていて、ヒントやサポートはおくるよ。」というスタイルをとることになる。教員からみると、既定の授業内容を講義するのとはちがひ、ゼミ学生がどう考えどう行動するかはあらかじめわからない。ゼミ学生をみながら、指導内容を変えていく必要がでてくる。ゼミ学生の動きが広がりすぎるとお手上げになる場合がもちろんある。その場合は目標を限定してみる手法もある。

学習者からみると、アクティブ・ラーニングは、いわゆる「調べ学習」と似ている印象を受ける。しかし、5冊の本を参照してワークシートを完成できても、アクティブではない。オリジナリティ。自分たちの思考プロセスに沿った学びのスタイルを自ら構築することこそアクティブ・ラーニングである。一見似ているように見えるから混同されやすい。学習者も従来型の教育関係になじんでいるので、問題をとらえる仮説を立てるまでが苦しい。それがつくれると楽しくなってくる。しかし、霧が晴れた瞬間を味わうまで、学習者自身がなにをやっているかわからないので、がまんできなくて、そのことで文句を言う場合もある。

アクティブな学びは、まさに学生が自分の学びのスタイルをつくり、その手法で、大学で学んでいくことを意味する。

### <付記>

本講演録の原稿化にあたっては、嘉悦大学FD・GP委員会（2007年度）の内田委員長と安田副委員長に、なにかとお世話をお掛けした。ようやくお約束を果たすことができた。この間実践的に探究してきた、学生が学習を進めるための大学と教育のあり方について、考えをまとめる、よい機会ともなった。お二人に深く感謝している。また、原稿の遅れについて寛容なお気持ちで待ってくださった、嘉悦大学研究論集委員会にもお礼を申し上げたい。学生の育つ授業・学生を育てる授業を念頭におく教員の皆さんに少しでも示唆するところがあれば、幸いである。

### 中村博幸先生プロフィール

1945年生まれ、静岡大学卒、大阪府立高校教諭（数学）を経て、京都家政短期大学の教員へ。現在、京都文教大学人間学部教授。2004年から2006年まで同大学共通教育担当部長を務める。大学教育学会常任理事。初年次教育学会発起人。そのほか、日本教育工学会や日本教育社会学会等の学会に所属。

短期大学時代から、基礎演習をコーディネート、京都文教大学では、初年次教育の導入を推進する。この間、他大学の教員とも共同で基礎教育の実践研究を行う。基礎演習に関しては、シラバス、ラーニング・スキルなどの教材開発・各種実践を行う。

大学コンソーシアム京都では、リメディアル教育、導入教育の実践を行い、「学生実態研究」プロジェクトの研究者。京都高等教育研究センターの「接続・導入教育」プロジェクトメンバーでもある。現在も、いくつかの大学で初年次・基礎演習実践及びカリキュラム等のアドバイスをを行う一方、文章表現とその指導についても実践的な研究を続けている。

（内田和夫 記）

（平成21年2月24日受付）